

日 時	令和6年7月16日（火） 13時30分～14時30分 令和6年7月17日（水） 9時30分～10時10分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
視 察 概 要	福井県永平寺町では、京福電気鉄道永平寺線の廃線跡地を利用して、日本初のレベル4自動運転移動サービス「ZEN drive」で、永平寺町荒谷から志比（永平寺門前）間の約2kmの区間の走行実施がされている。 この自動運転は、電磁誘導線とRFIDによる走行となっており、自動運行装置による運行速度は、12km/h以下。 2023年11月には、本来車が走るコースに障害物があれば自動的に停止して事故を未然に防ぐ機能があるが、それが機能しなかったため、自転車との接触事故が発生し、障害物検知システムを改善し運行を再開している。 7人乗り普通自動車で、ベースはヤマハ発動機株式会社のAR-07：グリーンスローモビリティ（電動カート公道仕様）（ゴルフカートの三列シートをイメージしてください）。 小松市の自動運転バスに試乗。2024年3月9日より、小松駅・小松空港間の片道約4.4kmを自動運転バスが約15分で接続し、2拠点間自動運転バスの路線バス（乗車人数は15名）として、通年運行をレベル2で開始している。
所見及び所感	高齢化が進む中で、無人運転は大きな可能性を感じさせるものであったが、運行区間が限られ、日常生活では利用しにくいといった課題も残るとされている。特に福井県永平寺町の自動運転では、信号も交差点もないところを進むことになっており、障害物を見つけても止まることはできても避けることはできない。 私たちの試乗時にもシステムエラーがあり、一台の車は、レベル2での運行となった。まだまだ課題は多くあるようで、今回の視察で、バス専用レーンはいらないと改めて感じた。

日 時	令和6年7月17日（水） 13時30分～14時30分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・自主防災の取組について
視 察 概 要	2024年1月1日、午後4時10分頃、石川県能登半島で最大震度7の揺れを観測する大地震が発生した。建物の倒壊や津波の被害などで死者は240人以上に（災害関連死を含む）。地盤の隆起も確認されている。 金沢市は震度5弱、人的被害、負傷者9名（死者なし）、建物被害9,225件、道路被害2,653件、崖地被害（崩土、ひび割れ）184件、水道被害約1,100（11地区）、下水道被害市内全域被害延長約36km、液化化が多く発生。金沢市には200か所以上の避難所があるが、124か所の避難所が開設。金沢市内で震度5弱以上の地震を観測した場合、解錠担当者が到着次第、市内全ての避難所を開設する。解錠担当者は地区長など複数いる。 避難所では、自主防災組織本部が設置されるなど地域の活動拠点となる施設で、市災害対策本部との連絡や物資支援の窓口となる。
所見及び所感	金沢市では、令和6年能登半島地震の対応を検証するための「課題検証会議」が設置され、地震による被害状況や災害対応を見直し、地域防災計画や防災マニュアルをより実効性の高いものに改定することを目的としている。また、能登半島地震に係る検証チームは、地震の原因や影響、災害対応の状況や改善点などを検証するために設置された内閣府の機関である。 このチームは、地震発生後の初動対応や自治体支援の適切性を評価し、今後の災害対応の改善に役立てることを目的としている。 具体的には、以下のような活動を行っている。 ・災害応急対応の自主点検レポートの作成 ・新技術や方策の導入に関する検討 ・各省庁や自治体の避難所運営状況の評価 ・物資調達・輸送の状況確認 この検証チームの活動は、今後の災害対応力の向上に大いに貢献することが期待されている。

日 時	令和6年7月16日(火) 13時30分～14時30分 令和6年7月17日(水) 9時30分～10時10分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
視 察 概 要	●自動運転 ZEN Drive レベル4について、運行事業者・まちづくり株式会社 ZEN コネクトから、出発点(荒谷)にある遠隔監視室で概要を伺った。 ●運行は自家用有償旅客運送の制度による。 ●京福電気鉄道永平寺線(単線)の廃線跡を改修した自転車歩行者専用道路の約2kmを無人走行。電磁誘導線とRFID(電波(電磁波))を用いて無線でデータの読み取りを行い、モノの識別や管理を行うシステム)による走行。土日祝日運行。12月～2月は運休。運行速度は約12km/時以下。 ●特定自動運行用車両は7人乗りグリーンスローモビリティ(電動カート公道仕様)に自動運行装置(ZEN Drive PilotLevel4)を装備。 ●周辺の歩行者等を検知できない強い雨や降雪による悪天候、濃霧、夜間は運行できない。(運行は10:00～15:10) ●2018年通行許可による自動運転車両の実証運行開始、2023年5月レベル4自動運転移動サービス開始。 ●荒谷停留所～志比停留所までレベル4自動運転ZEN Driveに試乗。 ●小松駅～小松空港間の自動運転バスに乗車。片道約4.4km、運転手が運転席に乗車し、適宜手動に切り替えながら一般道を走行。
所見及び所感	●永平寺の自動運転サービスは、一定の条件下で運転手が不要のレベル4としては日本初の運行。障害物を検知して止まった際、遠隔操作で対応できない場合は、電動自転車で現場に駆けつけて対応するケースもあるとのことであった。(実際、試乗中も1台は途中で停止した。)運行管理者は自動車免許を持っていなくても一定の研修を受ければ従事できるとのことであった。 ●自動運転車両が走行する自転車歩行者専用道路は、試乗時は専用道

	路のような状況であったが、土日祝日の運行時、歩行者等が通行する状況があるなら、その際の状態を見たいと思った。道路幅が狭く、すれ違いはそのスペースをとってあるところではしか行えないので、自転車が入った場合はかなり走行が難しいと感じた。 ●歩行者の後ろから車両が近づいていく場合、音声で注意を促すが、聴覚障害のある方等はどうなのかと思った。
--	--

総務環境常任委員会委員 待 鳥 美 光

日 時	令和6年7月17日（水） 13時30分～14時30分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・自主防災の取組について
視 察 概 要	●令和6年1月1日、午後4時10分、能登地方でマグニチュード7.6の地震発生。その対応を通して、実際の状況、課題の検証、復旧・復興に向けた取組についてお話を伺った。（金沢市では震度5強） ●金沢市内では負傷者9名、死者なしであったが、正月の発災で帰省先での死者が出た。道路被害2,653件、建物被害9,225件、ほか。 ●災害対策本部会議は、発災直後（午後6時）から1月7日までの間に計7回開催。避難所124か所開設、1月1日、午後9時30分時点で10,259人が避難。 ●金沢市では1月4日に能登被災地支援本部を設置し、1月6日から3月24日まで被災自治体への物資の搬送を行った。能登被災者受入本部を1月10日に設置し、最大314人の被災者を受入れ、被災者からの相談受付、避難者の健康状態把握等の支援を行った。また、被災自治体に消防応援隊、応急給水、水道復旧、下水道管路調査、医療支援、健康観察、ごみ収集運搬、災害廃棄物仮置き場運営補助等を支援する職員派遣を行った。 ●金沢市被災地区復旧技術検討会議を設置し、第1回会議を6月3日に開催した。 ●金沢市能登半島地震課題検証会議を設置し、第1回会議を5月20日に開催した。第2回会議は秋頃に予定。
所見及び所感	●金沢市では、小学校単位で62の校下全てに自主防災組織があり、各町会に1～2名の防災士を配置すべく資格取得の支援（補助金）を行っているとのこと。

	●避難所開設の遅れや運営スタッフの人員不足等の課題があがっているとのことであった。また介護等が必要な人に対応する福祉避難所については、一旦一次避難所に避難後、どこに行くかは地区の状況を踏まえて決定されることになるが、今後の課題であるようだ。 ●避難時ペット同行者への対応、女性目線を入れた避難所運営、在宅避難者や車中避難者への対応、物資配送人員不足、避難所の物資備蓄の不足、避難所開設等についてのタイムリーな情報発信、帰宅困難者への対応等が課題としてあがっているとのことであった。 ●十分な備えをしていますが、やはり実際に大きな災害が発生すると想定外のことが多く、対応する人員を考えていたより多く要したと伺った。当市でも人員配置の計画はあるが、被災した自治体の検証を踏まえ、随時見直していく必要があると思った。 ●実際に大地震災害に対応した部署の方のお話を伺うことができ、大変有意義な時間であった。
--	---

総務環境常任委員会委員 安 保 友 博

日 時	令和6年7月16日（火） 13時30分～14時30分 令和6年7月17日（水） 9時30分～10時10分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
視 察 概 要	今回の視察では、永平寺町におけるレベル4の自動運転カート（ZEN Drive）と小松市におけるレベル2の自動運転バスの試乗を行った。前者は廃線となった単線の鉄道跡を利用してゴルフ場のカートを3列シートにした様式のカートの運用をしており、自動運転区間は2kmである。サイクリングロードを兼ねていることから、通行人は多少あり、一度人身事故も起きたとのこと。後者は小松駅から小松空港を結ぶシャトルバスで、和光市が現在導入を検討している自動運転バスと同規模のバスであった。一般道を通行するもので、特に専用レーンなどは設けられていない。レベル2なので運転手が常にハンドルに手を掛けられるように構えており、かなりの頻度でハンドルを握り手動運

	転に切り替わっていた。
所見及び所感	レベル4で運用する自動運転車は制度上、ドライバーも監視室の監視者も必要ないということであったが、実際には常に人の目で監視をして非常時に備えなければ事故のリスクは回避しきれないという意識を感じ取ることができた。また、当日乗車した2台のうち1台は不具合により急遽自動運転レベル4から2へ切替え、運行者が運転席に乗車して試乗するに至った。事故防止のリスク回避のため、ちょっとした木の枝や草に反応して減速、停止を繰り返して走行していた。 一方で、小松市の自動運転バスは、カーブや交差点では毎回運転手が操作しており、自動運転というよりは運転アシスト程度のものであると感じられた。永平寺町の運行者も完全な自動運転を実現するには全ての車がそうならない限り実現しないだろうという感想を述べたが、実際に試乗してみて実感できた。和光市ではバス専用レーンを整備したが、その有用性については今回の視察ではヒントを得られなかった。

総務環境常任委員会委員 安 保 友 博

日 時	令和6年7月17日（水） 13時30分～14時30分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・自主防災の取組について
視 察 概 要	金沢市では震度5強であり、被害状況としては死者はなく、負傷者も9名にとどまったものの、道路被害、河川被害、崖地被害、水道被害、下水道被害が多数生じた。1月1日、午後4時10分発災時に災害対策本部が設置され、午後6時に第1回の本部会議が開催され、7日までに7回の会議が開催された。3月31日解散。 復旧・復興に向けた取組として、専門的な見地から能登半島地震の被災メカニズムの究明、復旧工法等を検討する目的で金沢市被災地区復旧技術検討会議が設置された。また、能登半島地震における被害状況や災害対応を検証し、地域防災計画等をより一層実効性のある内容に改定する目的で金沢市能登半島地震課題検証会議が設置された。 自主防災組織としては、54校ある小学校の校下(金沢の方言で小学校区のこと)を主に、全部で62の地域において全て自主防災組織が設置されているものの、そのうち地区防災計画が策定されているのは

	43 地区である。能登半島地震の際は、市から避難所開設の指示をするものだと思っていたとか、避難所の鍵がどこにあるのかわからないというようなことが課題としてあがった。
所見及び所感	金沢市における能登半島地震での震度 5 強は観測史上初の規模であり、ハザードマップの周知が進んでいないことと相まって市民が大変混乱したことが伺えた。避難所は 3 日間で全て閉鎖されたとのことだが、避難所運営スタッフの不足、避難所の寒さ対策、ペット同行者の対応など、課題も多く露見したとのことであった。これは私自身が当日能登で被災して、一晩子供たちと過ごした避難所においても同様の課題を感じていたものであり、断水に備えた水の備蓄・分配と併せて速やかに対策を進めなければならないと改めて実感した。 1 日も早い被災地の復旧・復興を祈り、犠牲になった方に哀悼の意を表したい。

総務環境常任委員会委員 齋 藤 幸 子

日 時	令和 6 年 7 月 16 日（火） 13 時 30 分～14 時 30 分 令和 6 年 7 月 17 日（水） 9 時 30 分～10 時 10 分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
所見及び所感	福井県永平寺町、車内無人レベル 4 自動運転車両による運行。 2021 年度より経済産業省と国土交通省が共同で進めてきた「自動運転レベル 4 等先進モビリティサービス研究開発・社会実装プロジェクト(以下、ROAD to the L4)」にて、自動運転移動サービスの実現に向けた実証実験を実施してきたが、福井県永平寺で実施する実証実験において、令和 5 年 3 月 30 日付で道路運送車両法に基づく自動運行装置としての認可、また、同年 5 月 11 日付で道路交通法に基づく特定自動運行の許可を取得した。 その後、最終的な確認作業を行い、福井県永平寺町から運行を委託された「まちづくり株式会社 ZEN コネクト」によるレベル 4 での自動運転移動サービスが 5 月 21 日から開始された。

	名前の「ZEN Drive」は町内外からの公募により決定し、「自動走行という先端技術が、人に寄り添うものであり、永平寺町に根ざした文化と、自動走行という文明が調和し、共生できる社会になる」という期待が込められている。 一方で石川県小松市は、新幹線が停車する小松駅と小松空港を結ぶ4.4 kmの区間で自動運転バスを導入している。10月に試験走行を実施、24年春に運行を開始している。24年度は運転士が乗車し、状況に応じて手動運転に替える「レベル2」で走行。
--	---

総務環境常任委員会委員 齋藤 幸子

日 時	令和6年7月17日（水） 13時30分～14時30分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・自主防災の取組について
所見及び所感	① 能登地震における被災地としての対応 ② 能登地震発生による自主防災の考え方 ③ 自主防災の取組開始時から見直した点 自主防災組織は、「自分たちの地域は自分たちで守る」という地域連帯感に基づき活動を行うものとして、別に定める「金沢市における自主防災組織活動指針」及び各地区が策定した地区防災計画に基づき、市や地元消防団、防災関係機関と連携協議・協力した活動を行う。 本市の自主防災組織は、地域的に一本性を有し、効果的な活動が行えるように小学校区等の単位での組織編成を進めている。 このため、各自主防災組織の活動拠点は、小学校など「避難誘導」において、拠点避難所として指定する施設に設置する。 市町村に対し、避難所の開設当初から間仕切り段ボール等のベッドを設置することや、栄養バランスの取れた食事、入浴、生活に必要な水の確保に努めるように要請されている。備蓄品の中にも女性用品、乳幼児、子供らの用品に配慮。 金沢市の自主防災組織の自助、共助、公助のバランス、行政の対応業務状況などがとても勉強になった。 今後の和光市の自主防災組織取組にも活かしていきたいと思った。

日 時	令和6年7月16日(火) 13時30分～14時30分 令和6年7月17日(水) 9時30分～10時10分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
視 察 概 要	和光市で実施している自動運転バスの今後を知るためにも、先進地事例を学ぶべく、福井県永平寺町で実施している日本初の自動運転移動サービス(ZEN drive)と、石川県小松市の自動運転バスを視察した。
所見及び所感	<福井県永平寺> 同事業は、特定の条件の下で完全な自動運転を行う「レベル4」の車両の運行をするもので、まちづくり株式会社 ZEN コネクトが実施しており、「レベル4」の運行が始まったのは、全国で初めてである。 走行ルートとして、鉄道廃線跡を自転車歩行者専用道路に改修した町道「永平寺参ロード」の約2kmを走るものである。 車両内には運行従事者は無人で、遠隔監視により最大3台の運行を管理している。 ・現在は観光客を対象に、土日祝日のみの運行(7人乗り)。 ・利用料金は大人100円、中学生以下50円で、一日10人程度の利用とのこと。 ・時速12km程度(実際の最高速度は19km)。 ・走行管理の際に、ドコモ・au・ソフトバンクの3キャリアの契約をし、回線状況のよい回線を使用して、データ通信をしている。 高齢化が進む中で、無人運転は大きな可能性を感じさせるものであったが、運行区間が限られ、日常生活では利用しにくいといった課題も残るとされている。特に同路線では信号も交差点もないところを進むことになっており、障害物を見つけても止まることはできても、避けることはできない。走行ルート脇の草木や道路上に落ちている枝等を認識し走行が止まるなど、安全性を担保するための利便性の低下や、管理するためにコントロールセンターに人員が必要であり(管理者以外にアルバイト2名雇用)、経済性においても課題はあると思わ

	れる。 <石川県小松市> 小松市では、2024年3月9日より、自動運転バスの路線バスとしての通年運行を開始した(レベル2走行。運転手が乗車しており、必要に応じて手動運転に切り替えている。また、安全のため、遠隔監視センターからモニタリングを行っている)。 小松駅～小松空港間の片道約4.4kmを、自動運転バスが約15分で接続し、2拠点間のアクセスをさらに高めるべく運用をしている。最大速度40kmで走行しており、普通に公道を走行しているのを実際に乗車(視認)したが、特に専用レーンが必要なことは感じずに、一般車両にも影響を及ぼすこともなかった。 和光市でもレベル4を目指す計画となっているが、運行管理のための人員配置や走行ルート of 整備など、安全性はもとより、経済性の視点も重要である。 現在は令和6年度末の実装走行を目指し、バス事業者の協力の下走行をしているが、その先の運営にあたり、コントロールセンターは誰が設置し、誰が管理するのか、その費用はどうするのか。今後どのような計画をし、どのような実現に向けた取組をしていくのか課題は感じる。 <最後に> 今回は2事業を視察することで、現状と課題を学ばせていただいた。費用と雇用と福祉のバランスをどうとっていくのか、この視察を有効活用し、和光市における公共交通計画に活かしたいと思う。 和光市で自動運転バス計画を進める場合、専用レーンは不要かと感じた次第である。
--	---

総務環境常任委員会委員 渡 邊 竜 幸

日 時	令和6年7月17日(水) 13時30分～14時30分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・自主防災の取組について
視 察 概 要	今年の正月に起きた能登半島地震の発災時における、金沢市の主に自主防災組織の取組と自治体との連携(対応状況)について視察をしてきた。

所見及び所感	今回の地震において、金沢市周辺では、震度 5 強の地震が発生。統計を取ってからここまでの強い地震の発生はなかった。 昔、江戸時代に震度 7 の地震があったとのことで、地震に強い金沢であった 金沢市内は元旦から 3 日の期間において、避難者開設・運営を行った。避難所運営については、普段からのルールが徹底されておらず、自主防災組織が主体的に運営することを知らない地区もあった。 自主防災組織は校下(こうか)ごとに管理運営をしていて、役所職員と校下責任者側に対象となる避難所(200 か所以上)の鍵を渡している市民より、避難所開設が遅かったという意見があったそうだ。 観光客(外国人含む)がいる関係で駅周辺が混雑した。 (正月休みという側面もあったのでは) 津波ハザードマップによる、津波 3 m 以上という被害想定箇所は少ないが、東日本大震災の影響もあり、沿岸部を中心に避難渋滞が発生した(標高的に、避難が不要な地区においても、より高い位置に避難する事象があった)。 まずは、一次避難所を開設し、保健師らの判断の上で協定(提携)先の民間施設にて、福祉避難所の開設(該当施設へ移送)をする計画につき、当初から福祉避難所の開設はなかった。 発災後の消防団がどういう動きをしていたかは、危機管理室は非認知。 地震を経て、令和 6 年度 5 月・6 月に 2 つの検証・検討会議体が設置され、秋頃に 2 回目の会議を予定(少なくとも、2 年度単位で検討を継続する)。 今回の視察を踏まえて、どんなに普段から計画をしていても、実際にどこで、どのような自然災害が発生するかは想定できず、その場での判断・対応が必要であり、また自助の精神で各地区での避難所設営・管理が求められていても、そのシステムがうまく機能しない可能性が低いと感じた。 和光市においても、危機管理室が主導で市の防災計画や防災力アップの取組を図っているが、備えの実効性を改めてシビアに見つめ直すことが必要なのかもしれない。 実際に和光市で大規模な自然災害が発生した場合、国や県や市による公助には限りがあり、まずは、自助・共助力を高めるためには、時
---------------	---

	間をかけて、市による啓発(計画)が必要である。 今回の視察で学んだことを、和光市でも活かせるように情報共有や意見交換などをしていく必要を感じた。
--	--

総務環境常任委員会委員 小 嶋 智 子

日 時	令和6年7月16日(火) 13時30分～14時30分 令和6年7月17日(水) 9時30分～10時10分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
視 察 概 要 所見及び所感	・単線が廃線になったため、鉄道の代わりになればと事業が開始された。 ・地域特性として駅周辺の施設を利用するための住民移動が発生し、さらには大本山永平寺までの観光移動が発生。鉄道が廃線となり不便であり、賑やかさがなくなり寂しいという点があり、安全な移動手段と地域活性化のツールとして自動運転に期待された。 ・車両内には運行事業者は無人で、遠隔管理室により1人が最大3台の自動運転車両の運行を管理している。 ・土曜、日曜、祝日(12月から2月は運休)10時から15時30分の間に運行。大人100円、中学生以下50円、未就学児無料。予約不要で利用できる。 ・レベル4自動運転 ZEN drive の走行環境条件 ●道路区間 永平寺町荒谷～志比(門前)間の約2km ●道路環境 電磁誘導線とRFIDによる走行 ●気象状況 周辺の歩行者を検知できない強い雨や降雪による悪天候、濃霧、夜間等でないこと ●自車の速度 運行速度12km/h以下であること など ・利用対象者は自力で乗り降りできる者とされており、限定的な利用にとどまっていると感じた。 ・一般道での走行については、まだまだ難しい状況。 ・廃線による不便さの解消をする必要性があり、新たに専用車線を整

	備するために環境が破壊されることもなく、適切な事業導入であると感じた。 ・レベル 2 での一般道走行を体験した。右左折時や周辺道路状況への対応が必要な時は、運転手に対応し安全の確保がされていた。
--	---

総務環境常任委員会委員 小 嶋 智 子

日 時	令和 6 年 7 月 17 日（水） 13 時 30 分～14 時 30 分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・自主防災の取組について
視 察 概 要 所見及び所感	・ 62 の校下地区に自主防災組織を約 5 年かけて整備。 ・ 地区防災計画は 43 の校下地区で整備されている。 ・ 自分たちのことは自分たちでしようと考えられた。 ・ 防災士の資格修得の費用は県と半分ずつ負担している。各町会に 1 ～ 2 名、約 1,800 名が目標。 ・ 能登半島地震では情報の錯綜が続いた。 ・ 避難所の鍵は自主防災組織にも渡してあり、自分たちのやりやすい形で管理、運用できるようになっている。 ・ 自主防災組織と職員との連携がうまくいかず、避難所の開錠に手間取った。 ・ 自主防災組織が管理している鍵がどこに保管されているのかわからないという事態が起きた。 ・ テレビで避難所開設の情報収集をすることとなり、タイムラグが発生したため現地に行って初めて開設されていたことを知るケースもあり、改善が求められた。 ・ 訓練はしていたが、いざという時に機能しなかった。 元旦の発災で人員不足。観光客への対応や寒さ対策が難しかった。 ・ 自主防災組織の今後の課題 ● 自主防災組織内の連絡、連携不足があり情報の連携不足となった。 ● 避難所開設の基準が分からず初動が遅れた。 ・ 震度 5 強であれば何とか大丈夫だろうと思っていたが、実際はそうではなかった。見直しを始めた。 ・ 想定し訓練を重ねても、実際に発災した時に思うように機能しなか

	ったり、想定と乖離してしまうことを踏まえた対策が必要であると感じた。
--	------------------------------------

総務環境常任委員会委員 岩 澤 侑 生

日 時	令和6年7月16日（火） 13時30分～14時30分 令和6年7月17日（水） 9時30分～10時10分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
視 察 概 要	永平寺町の「ZEN Drive」は、旧京福電気鉄道永平寺線の廃線敷を転用した自転車歩行者専用道路「永平寺参ろ一ど」（約6km）のうち、南側約2kmの区間で運行されている7人乗りの電動カートである。 平成28年に国土交通省と経済産業省が実施した自動運転実証実験の公募に永平寺町が応募し採択され事業化されたもので、永平寺町から委託を受けた「まちづくり(株)ZEN コネクト」が自家用有償旅客運送者として運行を担っている。 平成30年に保安要員を乗車させたレベル2での実証走行を開始し、令和3年からはレベル3の遠隔型自動運転システムを、令和5年からはレベル4での本格運行を順次開始した。 運行は降雪期の12月から2月を除く土・日・祝日の10時から12時と13時から15時で、運賃は大人100円・中学生以下50円である。 小松市の自動運転バス導入事業は、令和2年度に内閣府地方推進事務局から未来技術社会実装事業に選定されたことを受けて、JR小松駅から小松空港間の約4.4kmの区間において実証走行を実施し、令和6年3月からは路線バスとしてレベル2での定常運行を開始した。 運行は通年で、運賃は大人280円・小学生140円である。
所見及び所感	永平寺町の「ZEN Drive」は、国内で初めてレベル4の自動運転車両として認可を受けたものであるが、交通量が極めて少ない自転車歩行者専用道路での運行であるからこそ成立しているものといえ、実用性も需要も乏しく、採算性を度外視した実験的事業であると感じた。 小松市の自動運転バスは、交差点やロータリーといった主要部分は

	従来どおり運転士の手動運転により走行するなど発展途上であるが、新幹線駅と空港を結ぶ路線として事業の需要や成長性は高いと考える。
--	---

総務環境常任委員会委員 岩 澤 侑 生

日 時	令和6年7月17日（水） 13時30分～14時30分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・自主防災の取組について
視 察 概 要	金沢市では、市や消防局、消防団、町会連合会、社会福祉協議会などの関係団体が「金沢市における自主防災組織活動指針＜自らの地域は自らで守ろう＞」を合意事項として策定し、金沢市における市民の自主的な防災活動を積極的に推進している。 また、町会単位で活動する自主防災組織が各地域における市民防災訓練の企画立案を行い、地域の実情に応じた地域防災力の向上を図るなどの取組も行われている。 さらに、自主防災に対する意識向上へ向けた取組として、防災士の育成や、地域防災計画を策定した場合に防災資機材の購入に係る補助金の補助率を引き上げるといった制度も導入されている。 災害時の避難所の運営については、地域の自主防災組織が主体となっていくものとされており、市職員は避難所の開設や災害対策本部との連絡調整を担うという協力体制が確立されているほか、市は自主防災組織からの要請に応じて避難所の運営に係る研修を実施している。 しかしながら、令和6年能登半島地震発災時には、自主防災組織との連携が十分に図れず、一部の避難所の開設が遅れる事態となった。 また、金沢駅に多くの避難者が滞留したり、津波ハザードマップの内容が周知されず渋滞が発生するといった混乱が生じたほか、避難所に市外の避難者が押し寄せた結果、毛布などの備蓄品が不足した。 市はこれらの反省を踏まえ、地域防災計画などを一層実効性のある内容に改定すべく、「金沢市能登半島地震課題検証会議」を設置した。
所見及び所感	金沢市では、市や自主防災組織のみならず、各種関係団体が共同して活動指針を策定するなど、自主防災に対する意識の高さが伺えた。 また、市と自主防災組織が平素から役割分担や協力体制を構築しており、強固な互助関係にあることが特徴的であると感じた。

	これらは、伝統的に町会活動が活発である金沢市民の強い自治意識によるところが大きく、自治会加入率が低い和光市において機能的な自主防災の仕組みをつくるには、多くの課題があるものと考えた。
--	--

総務環境常任委員会委員 富 澤 啓 二

日 時	令和6年7月16日（火） 13時30分～14時30分 令和6年7月17日（水） 9時30分～10時10分
視 察 先	福井県永平寺町、石川県小松市
視 察 目 的	特定事件 8 地域振興対策について 特定事件 11 勤労福祉施策について 特定事件 13 交通安全について ・自動運転「ZEN Drive」について ・自動運転バスの試乗
所見及び所感	和光市版スーパーシティ構想は、駅から北へ外環道の側道部分にバス専用の車線を設けて自動運転バスを走らせることである。 コミュニティバス(市内循環バス)も5経路走っているが、バス停への到着時刻をちょうど1時間置きにする見直しも進めた実現ができています。 自動運転バスは、当市は全国でも早い導入になるが、先行している自治体永平寺町「ZEN drive レベル4自動運転」、小松市「空港との自動運転バス運行レベル2」を視察した。運営方法と将来の運転手不足に備えること、「2024年問題」に対処する先進事例として参考になった。 自動運転等の未来技術を積極的に導入し志向することは、和光市のブランディング、またはブランドマネジメントに寄与すると考える。自動運転バスや路線バス、循環バス、タクシー、シェアサイクル、マイクロモビリティも含めて、2点間を移動したいときに、どれとどれを組み合わせるといいのか、すぐに案内が出て予約できて決済も可能なスマホ用アプリを提供すること、和光版 MaaS の構築は時流が求める推進する施策と考える。 現在 Google マップルート検索で市内循環バスが利用可能であり、手元に時刻表が無くとも、複数の公共交通機関を組み合わせた乗換え検索も利用可能になっている。 今後は、利便性の追求と周知、また費用対効果が求められると思う。

日 時	令和6年7月17日（水） 13時30分～14時30分
視 察 先	石川県金沢市
視 察 目 的	特定事件 7 防犯・防災対策について ・ 自主防災の取組について
所見及び所感	① 能登地震における被災地としての対応 ② 能登地震発生による自主防災の考え方 ③ 自主防災の取組開始時から見直した点 自然災害が激甚化・頻発化する中、国や自治体による災害対応を不断に検証し、必要な見直しを行うことが欠かせない。 政府は防災基本計画を修正し、能登半島地震で高齢者や要配慮者が数多く被災したことを踏まえ、災害応急対策に「福祉的な支援」の必要性を明記している。 市町村に対し、避難所の開設当初から間仕切りと段ボールベッドを設置することや、栄養バランスの取れた適温の食事、入浴、洗濯など生活に必要な水の確保に努めるように要請されている。備蓄品の調達では女性、子供らへの配慮を求めている。 また在宅避難者への支援拠点や車中泊避難者向けスペースの設置、保健師や福祉関係者、NPO法人などと連携し平時から住民の健康状態を把握することを新たに加えている。 金沢市の自主防災組織の運営と市の取組、約45万都市の金沢市のオペレーションは参考になった。自助、共助、公助のバランスと行政の対応方法は、現実に能登半島地震におけるリアルな対応状況等の説明を受け困難を伴うことも参考になった。 暮らし、なりわい再建、復旧・復興に対応する行政として何が必要か、被災者の負担軽減につながる施策をすることが「誰も取り残さない復興」へつながることと思う。